

JSCPニュースレター

10

No.10 2018年3月発行 編集・発行・日本コミュニティ心理学会広報委員会

日本コミュニティ心理学会第20回記念大会報告

(大会長 久田 満)



2017年7月1日・2日、上智大学四谷キャンパスにおいて第20回大会を開催しました。テーマは「パラドックスの中でどう生きるか」。このテーマには様々な思いを込めました。参加者数209名（うち大学院生58名）。研究発表45件、自主企画5件で、大会史上2番目の盛況ぶりでした。

初日の冒頭に、前例のない大会長講演を入れさせていただきました。参加者へのごあいさつと基調講演の前座と位置付け、「日本のコミュニティ心理学の過去、現在、未来」というテーマでお話させていただきました。「過去」として、山本和郎先生との思い出を中心に、1975年から続いた「コミュニティ心理学シンポジウム」と、そこから学会として発展してきた経緯を若い世代の皆様にお伝えしました。「現在」として、学会誌「コミュニティ心理学研究」の論文内容の分析結果を基に本学会の研究テーマの動向をお話ししました。そして「未来」として、学会が取り組んでいくべき課題を公認心理師制度の発足を念頭に入れながら私見を交えてお話ししました。この講

演で協調したかったのは「（本学会が）変わらずにいるためには変わり続けなければならない」というパラドックスでした。

基調講演は、岡檀先生に「道草は必須、脱線はチャンスー日本で最も自殺が少ない町での4年間のフィールドワークからー」というテーマでお願いいたしました。内容はまさに大会テーマであり、道草や脱線から貴重な情報が集められるというパラドキシカルなフィールドワークを基に見出された知見に、会場一杯に埋め尽くされた聴衆の心には感動と納得が行き来していました。当日参加された方もそうでない方も、先生のご著書「生き心地の良い町ーこの自殺率の低さには理由がある（講談社）」をぜひお読みください。

みな様ご承知のように、2016年7月12日、日本のコミュニティ心理学界を牽引して来られた山本和郎先生が亡くなりました。山本和郎先生追悼シンポジウム「様々な心理療法に生きるコミュニティ・アプローチ」は、高橋美保先生を中心に企画され、山本先生の門下生達（森さち子先生、福島哲夫先生、津川秀夫先生）が先生の教えを実践の場でどのように生かしているのかを報告し合い、一歩離れた立場から黒沢幸子先生と中村菜々子先生がコメントするという、かなり贅沢な試みでした。登壇者一人ひとりの話題が豊富で、フロアーからの発言も加わり、非常に有意な時間を過ごすことができました。

その他、大会企画ワークショップ「コンサルテーションの教育のあり方について考える」（企画・司会・上田将史先生）や研究委員会企画シンポジウム「コミュニティ心理学におけるプログラム評価ー理論・実践・研究の方向性ー」（企画・司会・安田節之先生）の会場も盛況で、参加者はそれぞれのテーマに関するたくさんの示唆を得たのではないのでしょうか。例年どおり初日の夜に、「山本先生1周年忌の集い」として懇親会を開催しました。始めに全員で黙とうをして先生のご冥福をお祈りし、先生的朋友光岡征夫先生による献杯のご発声ののち、それぞれが近況を語り合い、最後は「山本先生クイズ大会」で盛り上がりました。この集いを企画して下さった山本ゼミOGOBの方々に厚く御礼申し上げます。

このように第20回記念大会は盛況のうちに終了しました。大きな事故もなく、天候にも恵まれ、全国各地より20代から80代までの多くの方々に参加して頂きました。どうもありがとうございました。最後になりましたが、スカイブルーのTシャツ姿で裏方としてこの大会を支えてくれた法政大学丹羽ゼミ、立教大学安田ゼミ、そして上智大学久田ゼミの学生のみな様に感謝申し上げます。

第20回大会に参加して ～ 大学院生より ～

第20回記念大会という記念すべき大会に参加させていただき、口頭発表の機会をいただきました。私にとっては昨年に続き2年連続の参加となりましたが、実はちょうど10年前、第10回大会（大会長北島 茂樹先生・副大会長田嶋 誠一先生）でも事務局長をさせていただいたことがあり、縦横無尽に繋がるコミュニティが繋ぐ不思議な縁を感じました。

大会長久田 満先生による、学会の来し方を振り返りながらの「変わらないためには変わり続ける必要がある」という力強いメッセージ、岡 檀先生の自殺希少地域というコミュニティでの調査から未来を描く示唆深い基調講演、そのほか参加させていただいた全ての場で、「横だけではなく縦にも繋がり続けることの大切さ」を常に感じ続けることができた大会でした。10年先、20年先に自分が何をしてきたかを、コミュニティを通して振り返ることができるように、未熟ながら私も研究・教育・臨床実践などに邁進したいと思います。

大変刺激的で、学問の持つ愉しみににも触れさせていただきました大会準備委員会の皆様ならびに上智大学スタッフの方々に、この場をお借りして深く御礼を申し上げます。

今後ともどうぞよろしくお願いいたします。（北翔大学 澤 聡一）

上智大学で行われた第20回記念大会では、話題提供者として大会企画ワークショップ、ポスター発表で参加させていただきました。大会企画ワークショップ『コンサルテーションの教育のあり方について考える』では、厳しくも温かいご意見に恵まれました。

特にコンサルテーションについて体系的に学んできたことが少ないというアンケート結果やテーマの内容から若手の参加が多いと思っていましたが、ベテランの先生方にも多くご参加いただき実践的なアドバイスをいただくことが出来ました。今後の活動に活かして参りたいと思います。これまでも第18回大会ではポスター発表、第19回大会では自主シンポジウム、とこれまでも多くの先生方からの支えをいただきながら参加して参りました。

今回の発表では『対人援助職を対象としたEAP活動の展開—児童福祉施設での実践報告—』というテーマでポスター発表いたしました。専門領域の異なる方からも多くのご意見をいただくことができ、毎回大変有意義な時間を過ごすことが出来ました。大会に参加する毎に新たな視点が生まれ、これまでの自分の活動を振り返り、また今後の活動について検討することが出来ています。

最後になりますが、本学会大会の運営にご尽力いただいた皆様に御礼申し上げます。

（一般社団法人心理支援ネットワーク心PLUS 玉澤知恵美）



コラム

コミュニティ心理学と公認心理師 小坂 守孝（北翔大学）

いよいよ平成30年度から公認心理師試験が実施される。先立って厚生労働省より発表された「公認心理師になるために必要な科目」の中にはコミュニティ心理学の文字こそなかったものの、その科目一覧に記載されている主な内容や、後日発売された「公認心理師 現任者講習会テキスト」（金剛出版）を参照すると、「多職種連携及び地域連携」「個人のエンパワーメント」「虐待の発生予防」「教員・保護者へのコンサルテーション」「一次予防、二次予防、三次予防」「当事者の強み」などの用語が随所に見られた。このことから、コミュニティ心理学に関連の深い知見が複数の科目において含まれていると考えて差し支えない。

「コミュニティ心理学ハンドブック」（東京大学出版会）や「よくわかるコミュニティ心理学」（ミネルヴァ書房）などに掲載されているコミュニティ心理学の主要な理念と照らし合わせてみると、予防精神医学において提唱されている予防の考え方や、福祉領域においても馴染みのあるエンパワメント・ソーシャルサポートなどの概念は公認心理師の実践においても比較的取り入れられやすいであろう。

その一方、公認心理師において必要な知識として十分反映しきれていないと思われたのは、生態学的視座、コミュニティ感覚、社会変革といったものである。

これらは、コミュニティ心理学独自の概念として伝えてゆかねばならない。

例えば、「他職種連携・地域連携」については実践として触れられているものの、個と環境の適合を目指すコラボレーションとは似て非なるものと考えられた。また、障害児・者における「障害の医学モデルから社会モデルへの転換」という観点は、切り口は異なるものの、生態学的視座に近い視点と言える。

一見すると公認心理師における具体的介入方法に取り入れられている手法は種々あるものの、それらが小手先の手法に終わらず、真に「個と環境の適合」のために「社会変革」を目指すものであるためには、そのプロセスを貫く理論体系として、また、実践のためのメタ理論としてコミュニティ心理学という学問を伝えてゆかねばならない。

また、言うまでもない事ではあるが、コミュニティ心理学が目指すところは公認心理師の実践と重なる部分が多いものの、それが全てではない。そもそもコミュニティ心理学が包み込むものは公認心理師業務のみに収まりきるものではない。そして、コミュニティ心理学は「市民のための心理学」であり、専門家のみならず市民と共有できる心理学として広く社会問題の解決に寄与できるものであることも伝えてゆかねばならない。

以上、まだまだ情報が不十分な中ではあるが、今後、公認心理師におけるコミュニティ心理学の教育・啓蒙という観点から検討が必要と思われるため、私見を述べさせて頂いた。会員の皆様におかれては様々な意見があるかと思うが、この関係の議論も活発になってくればと願っている。

私が、この奨励賞を頂いたのは、2010年のことで、「写真投影法による子どもの危険認知の把握」というテーマでした。授賞式のことは今でもよく覚えています。前日までオーストラリアのメルボルンでInternational Conference of Applied Psychologyが開催されており、The effect of "Safety Map of Pupils' Commute" on self-efficacy of safety awarenessと題する発表を行ったばかりのところでした。成田空港に降り立ったその足で、会場である上智大学に向かったのですが、国際学会からの緊張が緩んだためか、気温差のためか（気温差25度！）、ひどく体調を崩してフラフラの状態でした。それを知った、当時お付き合いをしていた彼女（現在の妻）が大阪から向かえに来てくれたことをよく覚えています（笑）。

子どもの目線に立ってみると、大人とはまるで異なった世界が広がっています。身長の違いや、関心の違いなど理由は様々でしょうが、実際、子どもたちが見ているものは、大人にはなかなか分かりません。そこで採用したのが、写真投影法という方法でした。写真を使うことで、子どもの危険認知の特徴を明らかにし、それに基づいた「地域安全・安心マップ」作成しました。写真によって子どもの危険認知のパターンを把握し、それを踏まえた地域安全マップを作成することで、効果的な安全マップを作成できると考えました。受賞後も、いくつかの小学校に協力をしていただきながら研究を進め、Webデータベースと連携させたシステムの開発も行いました。

その後は、子どもの安全から、大人のコミュニティ内の居場所へと研究対象を広げ、いわゆるサードプレイスに関する研究も行っています。もともと社会心理学を専門領域としていたのですが、ご縁がありコミュニティ心理学会に入会し、さらに賞を頂いたことも励みになり、人と環境の関わり方の在り方について、より深く考えるようになりました。

受賞の1年後、信州への赴任が決まり、研究の拠点も人口25万人の地方の大学町へと変わりました。現在は、様々な形でコミュニティの問題に関わっているのですが、コミュニティ心理学の視座の重要性を日々実感しています。この規模の大学町では、研究一辺倒では成り立ちませんし、現場では「理屈は良いから、とりあえずなんとかしてよ！」と言われることも多々あります。そんな中、目の前の問題に対して、理論や分析的アプローチに立脚することで、対処療法に留まらない問題の理解や解決に繋がるようにと、悪戦苦闘の日々です。改めて「若手研究実践奨励賞」という名称が意味することを感じています。

編集後記

今号では出しゃばってしまい、別項にも登場してしまいました。本来であれば多くの会員の皆様にご寄稿頂くべきところ、当方の準備不足もあり大変申し訳ございません。

今年度の大会テーマでもありましたが、システム論でも言われていますように、システムは変わるべきところが変わることにより維持できるのでしょう。緩やかな変化と共に学会が続くことを願っております。私がここを担当するのも今回でひと区切りとなります。これまでお世話になりました。次号は新しい体制で更に充実した内容をお届けできることと思います。

（北翔大学 小坂守孝）

日本コミュニティ心理学会ニューズレター 第10号
2018年（平成28年）3月31日発行

- ・発行 日本コミュニティ心理学会
- ・編集 日本コミュニティ心理学会広報委員会
（小坂守孝・杉浦久美子・平野貴大・丹羽郁夫）
- ・本学会ホームページURL
<http://jscp1998.jp/>
- ・広報委員会メールアドレス publicity@jscp1998.jp